



Data

監督: ブノワ・ジャコー
原作: ハドリー・チェイス『悪女イヴ』(創元推理文庫刊)
出演: イザベル・ユペール/ギヤスパール・ウリエル/ジュリア・ロイ/マルク・バルベ/リシヤール・ベリ

■ショートコメント■

◆ジャンヌ・モローが主演した『エヴァの匂い』(62年)は、中高校生にはちょっと刺激が強すぎたため、公開当時に私は鑑賞できなかった映画。他方、本作のエヴァ役に主演したイザベル・ユペールは既に65歳だが、『エル ELLE』(16年)、『シネマ40』31頁)では、『氷の微笑』(92年)におけるシャロン・ストーン並みの生ツバもののレイプシーンに挑戦し、見事アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた、フランスを代表する美人女優だから、本作は楽しみ。

◆ところが、本作はエヴァが登場するまでの導入部分がやたら長い。そこでは、老作家の介護をしている青年、ベルトラン(ギヤスパール・ウリエル)が、老作家の突然の死に出会う中、彼の遺作を自分の作品として作家デビューする姿が描かれるが、そんなことってホントにありうるの？

演劇化された同作は大ヒットし、ベルトランは美しい婚約者カロリーヌ(ジュリア・ロイ)にも恵まれ、幸せの絶頂だったが、パトロンからは次作の催促が厳しい。「目下、執筆中・・・」とごまかしていたが、姿かたちはカッコ良くても、作家としての才能は持ち合わせていないベルトランには所詮それはムリらしい。去る7月13日に亡くなった劇団四季の創設者、浅利慶太の爪の垢ほどの才能でもあればいいのだが、カッコだけのベルトランはごまかしばかり。今日も、カロリーヌの別荘に行けば書けるかも・・・、と口実をつけてカロリーヌの別荘に向かったが・・・。

◆エヴァがスクリーン上にはじめて登場してくるのは、その別荘で1人、風呂に入っているとところだが、なぜエヴァは客の男と一緒にカロリーヌの別荘に入り込み、1人で風呂に入っているの？それを見たベルトランが別荘の“所有者”として怒ったのは当然だが、なぜか追い出したのは客の男だけで、エヴァには一目ボレしてしまったらしい。たしかに、エヴァは一見魅力的だが、ケパイ化粧のこんな娼婦にホントに魅力があるの？ちなみに、

エヴァのお屋敷に出向いての“料金”はシャンパン込みで300とのことだが、それって日本円でいくら・・・？

◆チラシに見る本作のキャッチフレーズは「官能と誘惑。」「官能の極みへ——」。そしてストーリーラインは「新進気鋭の美しい男ベルトランは、盗作した作品をもとにのし上がっていく。しかし娼婦エヴァに、彼の人生は次第に狂わされていく——。」というもの。また、原作は『悪女イヴ』だ。したがって、本作の焦点はイザベル・ユペール演じるエヴァが、いかんにしてスクリーン上に官能の香りを充満させ、美しい恋人のいる新進作家(?)ベルトランをその魅力(魔性)に引きずり込んでいくのだが、残念ながら私にはその魅力が感じられない。

本作にはエヴァのヌードシーンもベッドシーンも登場しないし、これぞという官能シーンも登場しない。ただ、電話での思わせぶりの会話でストーリーが繋がっていくだけだ。また、本作のストーリーのもう一方の軸は、素人作家のベルトランがエヴァと出会う中、エヴァとの会話を拠りどころとして新作の構想を固めようとするところだが、エヴァとのちょっとした会話を繋いでいくだけでは新作の“骨太な構想”が見えてこないのは当然。これでは新作作りの苦労やその面白さを感じ取ることができないのは当然だから、この展開にはいささか不満が・・・。

◆エヴァは結婚しており、その夫は世界を飛び回っている実業家という触れ込みだが、何のことはない。エヴァの夫は刑務所に収監されているヤクザの男。それでもカネは持っているようで、「仮釈放できるのなら、どんなことでもする」としおらしいことを言っているから、エヴァも弁護士に相談してそれ相応の努力を続けていた。その結果、ラスト近くで夫は釈放されたが、そんな状態のエヴァにベルトランが露骨に近づいていくと、当然トラブルに・・・。

そこで、ボコボコにされ、半殺し状態にされてしまったベルトランをどう解釈するのかは難しいが、その状態から一気にラストを迎える本作の結末をどう考えればいいのか・・・？ジャンヌ・モローが主演した『エヴァの匂い』は今でも観てみたいが、本作は完全に期待外れ。いやはや・・・。

2018(平成30)年7月24日記